

## 全体会（分科会の総括）

平成14年10月19日（土）

午後3時15分～5時

市民会館4・5集会室

コーディネーター：長谷川 貞夫 氏

### 《司会》

これより全体会を始めてまいりたいと思います。私は進行をつとめさせていただきます、企画財政部の並木でございます。どうぞよろしく願いいたします。また、この会では手話の方をお願いしておりますのでご紹介させていただきます。

### - 手話通訳者紹介 -

それでは、開会にあたりまして、野澤福生市長からあいさつをいただきますので、よろしく願いいたします。



### 《市長挨拶》

きょうはお出かけいただきましてありがとうございます。この「まちづくりフォーラム」については、昨年5つ、今年4つ開催したわけですが、1年程度経過したのでその状況等をお話し申し上げるとともに、市のほうでもそれをもとにどのような形になっているかということについてご報告できればということで、きょうの全体会を開催させていただきました。

なぜこういうことをやるのかということでございますが、現在、構造改革ということではいろいろなことが進んでいますが、その中の一つに地方分権、あるいは地域主権といわれている中での課題があるわけがございます。これはどういうことかといいますと、いままでの市の行政というものは国や都が大枠を決めておりまして、それに沿ってやっていくというやり方で進んできたのですが、そうではなくて、自分たちで自分たちのまちをこういう形でやっていくのがいいという独自のまちづくりを進めていくという、今はそういう流れになってきています。

そのような意味で考えますと、市民のみなさんが、自分たちではこういうまちにしたい、こういうようなことが一番このまちにはいいのではないかと、そんなことをいろいろな形で出していただいて、キーワードでいいますと自己選択・自己決定・自己責任というような言い方をしておりますけれども、そんなやり方がすべての分野に浸透していく、そうなりますと、我々がどういふうなまちにしていこうかということをお互いに話し合いをして、同時に職員もそういったお話しを一緒に聞かせていただいたり、討論したりしながら、自分たちのまちをこういうふうにしていこうというご要望にそった形でまちづくりを、協働といったキーワードのもとにまちづくりをしていかなければいけないのではないかと考えているわけでございます。

今までの考え方を180度転換する部分もあるかもしれませんが、そのようなことをしながら福生というまちをつくっていかうということ。そのひとつひとつのテーマとなっているのが、きょう話しをしていただいた分科会のテーマ、そのほかにもいくつもあるのですが、そういった形で動き始めているものから、きょうはいろいろとお話しを深めていただいて、その結果をこれから全体会の中でお話ししていただくということでございます。

これから長谷川先生のコーディネートによって進めていただくわけですが、分科会も含めましていろいろな方にコーディネーターをお願いしました。それぞれの立場からいろいろと話題を提供していただいたり、様々な役をお願いしたみなさまに心から感謝申し上げたいと思います。また、きょうお見えの方々にも、そういう役割を是非お果たしていただければと思っております。

これからの時間は長谷川先生にお願いしたいと思っております。きょうは分科会のコーディネーターに引き続き、全体会のほうのコーディネーターもお願い申し上げます。

それではよろしく願いいたします。

### 《長谷川》

ご紹介にあずかりました長谷川でございます。なぜかたった一人で寂しくみなさんと対面するという立場になってしまいました。第1部ではそれぞれの分科会、それぞれのテーマのところまで議論をなさってきてお疲れのことと思いますが、この全体会において、青少年、国際化、都市景観、商業振興、環境、バリアフリーという6つのテーマを総合して、

なにかひとつにまとめるということは、言葉では簡単ですが、これからみんなで一緒にやっていこうと思うわけでございますけれども、そのためには、みなさんのご発言がたくさんあることを願いつつ、自己紹介を含めてごあいさつさせていただきます。

実は今朝、私の背広を替えていたときに、扇子が出てきたのです。「トウセン」とかみさんに言われました。冬の扇と書きます。すなわち、役にたたない...(笑)。もう一方では一人で頑張るという意味もあるのですが、私の場合は冬扇でございますから、みなさんのご協力を得て、きょうの会が楽しく有意義なものにできればと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



早速進めさせていただきますが、いつまでも私の顔を見ていても退屈でしょうから、座らせていただきます。申し訳ございません。

それでは、各分野の総括、きょう2時間のを各分野5、6分にまとめてお話しいただければと思います。

各分科会(青少年、国際化、都市景観、商工業振興、環境、バリアフリー)からの報告

(内容は各分科会のページをご覧ください。)

《長谷川》

以上6つのテーマについて発表をしていただきました。参加されている方から何か質問があれば、どのテーマでも結構ですとお受けしたいと思いますが、どなたかいらっしゃいますか。

《Aさん》

Aです。商工業振興のほうで、歩行者天国の話がでたのですが、なぜ今無くなっているのか、それをお聞きしたいのですけれども。

《Bさん》

Bでございます。私もあまり詳しくはわかりませんが、始まりましたのがたしか警察の指導というようなことがあって、福生でもやったほうがいいのではないかとということで、始まったようでございます。そもそもの始まりがそんなようなことでございます。

その後、地元のほうではだんだん車社会になって

まいりましたので、歩行者天国は20年くらいやったのでしょうか、それから環境も変わってきました、車社会のなかで車を止めてしまうのはいかなものか、というような意見が強くなってきたということで、そんなことから中止されたのではないのではないかと思います。あまり確かではありませんけれども、およそそんなようなところでございます。

《長谷川》

ありがとうございました。はっきりは解りませんが、概ね現段階ではそんなようなところだということです。

実際に行政の方たちがプロジェクトチームで進めていく場合ですと、そのあたりも調査、検討していただけたと思います。私も大変興味のあることでございます。

私からバリアフリーに関して一つ質問をさせていただきたいのですが、バリアフリーの推進計画というのは、心なのかハードなのか、それとも両方なのか、それだけで結構ですから、どなたかお答えいただきたいのですが。

《PT大越》

心なのかハードなのかということですが、我々としては、ハードも心のバリアフリーがないとできませんので、心であると考えております。

《長谷川》

市民の一人として深く感銘を受けました。きっとそういう市ができるのですね、市長。(会場笑い声)

次のセクションに移りますが、自分が参加しなかった分野に対して、これが言いたいという方、どの分野でも結構ですから。それではまず、青少年に対して、私は参加しなかったけれども、こういうことを言いたいという意見がありましたら、どなたでも結構です。ほかのコーディネーターの方でもよろしいですよ。

《村山》

村山でございます。身につまされる思いでお話を伺ったのですが、子供を叱れない親、しつけができない親とうのが存在しているというのは大変大事な問題ではないかと思うのですが、もしそれについて何か解決する方策がございましたら、ぜひ拝聴したいと思うのですけれども。

《長谷川》

きょうご参加いただいておりますけれども青少協というのがありますね。正式な名称は福生市青少年問題協議会。福生市教育委員会生涯学習部社会教育課でございますけれども、その青少協だよりの最新号の10月15日付けのものに、「東京都及び市区町村では、心の東京革命行動プランを推進しています。」ということで、家庭、学校、地域へのそれぞれの連携という中に、「叱るべきときはきちんと叱ろう、家庭では担任の学校の先生が叱ってくれたら感謝の気持ちを持つと、人に迷惑をかけたときは

きちんと叱ろう、近所の子どもを叱れる家族づきあいしよう。」というようなことで、本当にすべてきょうのテーマに通じるのでしょうかけれども、ソフトのほうからまずそういう意識を持っていこうことですが、具体的な施策をプロジェクトチームがつくるといことは、大変ですね、という同情はコーディネーターとしては申し上げたところでございますが、なにかプロジェクトチームのほうからありますでしょうか。

よろしいですか、それでは他の方から青少年について意見を受けたいと思いますが。

《Cさん》

Cと申します。バリアフリーのほうに参加させていただきまして、ちょっとだけ意見を述べさせていただきます。

青少協についてもバリアフリーについても、両方とも共通する問題があると思うのですが、やはりそれは心の問題ですね。

小さいときからハンディがある人も、いろいろな人との係わり合いというのは、少年についても心の成長に一番関係してくるのではないのかというふうに思っています。私が思うのは、教育の場であってもどこにおいても、ハンディがある人も一緒に過ごすことによって、それから、お年寄りも一緒にそのまちに住んでいますので、心のバリアが取り払われていけば、非行の問題とかいうものが無くなるのではないかと。今私は本八第二に住んでいますけれども、この年でなんだかおこがましいのですけれども、青年部なんていう形で年寄りばかり集まりましてですね、遊びでつくったグループなのですけれども、毎年12月、ちょうど福祉バザーをやる12月初めの日曜日ですが、このとき餅つき大会をやっています。小学生を集めて、それから今現在は中学生のほうもお願いするようにして、あと福寿会ですね、老人の方を招待という形で餅つきをやって、小さい子とお年寄りとの接点をつくるように。今は核家族化しているということではなかなかお年寄りとの接点がない。親もお年寄りとの接点を持っていないものですから、道徳的にいっておかしいのですけれども、昔はこういう風な形で良かったなんて言っても、今の若い人達には通じないという問題もあると思うのですよね。ただそれも話し合いでできる問題というのもすごく多いと思うのですけれども、そういう接点を持たせようということで、小さいお子さんともう十年近くつづいているのですけれども、徐々に中学生、高校生、はやく言えば青少協の方と一緒にそちらのほうに接して心のバリアを無くしていこうと、そうすることによって地域の活性化とかそういうふうな問題がでてくると思うのですよ。

ですから、青少年の若い人達が、話ができないというのは、そういう心のところにバリアがあるから親も怒れなくなる、子供も親に対してちゃんとした話ができないというふうな問題があるのではないかと思いますので、各地域でもそういうふうな活動ができればですね、地域活性化資金なんていうのも

出ていると思いますので、それをできるだけ活用しながら、そういうふうな活動もいいのではないかと考えておりますので、これから青少年の分科会のほうでもですね、そのへんも考えていただきたいなと考えております。

《長谷川》

ありがとうございます。貴重な提言をいただきました。それでは時間の都合もありますので青少年の部分はこのくらいにいたしまして、続いて国際化のほうへ移りたいと思います。

小林コーディネーターがいわれたのだと思いますが、外国人が多いことを資産、財産として発展させるような形をつくったらどうかというようなお話があったようですけれども、具体的なイメージというのは、コーディネーターの小林さん、お持ちですかね。

《小林》

いろいろな手段があると思いますけれども、福生にあればいろいろな言語がある、文化がある、そしてまた、歩く場所あちこちがNOVAであるということですね、チャレンジしたかったら声をかけて道案内とかしていただいて、そうやってチャレンジできる土壌があるというのが財産かなと思っております。いつでも、外国人の方も日本人の方も逢えるような場所があると面白いなと思っております。

《長谷川》

ありがとうございます。

バリアフリーのところに出ていたけれども、青少年のところでは叱れるということは、この、バリアフリーで出ていた感謝できる人をつくるのとある意味では一緒なわけですね。その辺を、先ほども質問いたしましたけれども、本当に優等生な答えが返ってきましたけれども、バリアフリーをどう推進していくかというのは、役所の職員が相当工夫しないと具体に見えない、具体に見るためには一年や二年では無理だということなのですが、多分そうだと思うのですが、概ねどれくらいのイメージで職員の方々は考えているのですか。計画そのものはすぐできますよね。なにか形に現われてくるとしたらどのくらいですか。

《PT大越》

バリアフリーの関係の市長への提案といいますか、プロジェクトチームとしての考えは、平成22年くらいを予定しておしまして、バリアフリーにつきましてはすぐに風景が変わるということはないと思います。ただ、風景を変えるには少しずつ、一步一步でも進めなくてははいけませんので、何年度に何をというところまでは言えないかもしれないですけれども、たとえば10年後までにはせめて何と何をとか、そのようなことは市としての方針で作ってほしいと考えております。

《長谷川》

どなたか商工業振興について、何かございませんか。

《Dさん》

提案というのか質問というのかわかりませんが、商工会議所のメンバーを中心に異業種交流会をやっているところがあるのですね。たとえば都内でいえば、狛江21なんていうのは異業種交流会をやって、みんなで寄せ集まってなにをつくったかといいますと、剪定した木を炭にするという、非常に環境にやさしいものをつくったのですけれども、それから足立区のほうでは、50ccのバイクを利用した消火作業、消火器とか、それから中野区のほうでは、私もちょっと参加していたのですけれども、エコビジネス研究会というのをやっていたのですけれども、こういう景気の低迷している時代ですね、個々の中小企業だけではできないけれども、それぞれいいものを持っている会社っていうのはいっぱいあるのですね。かならずしも福生市内だけにとどまらなくてもいいかもしれませんが、そういうのをつくってなにか新しいビジネスをつくるようなものができればというような提案をしたいと思います。

《長谷川》

ありがとうございます。これに対しては答えになるということではなくて、ひとつの提案として、プロジェクトチームのほうで今の提言をうけてお考えいただきたいとまとめさせていただきます。

では、つづいて、都市景観については、先ほど歩く文化、自分たちのまちを自分たちでつくるといって、コーディネーターの本多さんからなのでしょうか、あったようですけれども、トータルコンセプトとしては何か意見ができたのでしょうか。福生のまちという意味での都市景観のコンセプト、平たくいえばキャッチフレーズですね、そのようなものは意見ではでてこなかったのでしょうか。

《村山》

コーディネーションをいたしました村山でございます。それについては、福生のまちが非常に多様性に富んでいるまちであるということのご意見があったと思います。それから、小さな面積のまちでありながら5つもJRの駅があると、そういう特色をもっと強く出していかなければいけないのではないかとというのが、統一の方向性ではなかったかと思えます。スポット的に見れば、非常に変化に富んだ魅力のあるまちですので…。実はこういうのが配られたのですね。福生景観彫刻マップというものです。これには非常に魅力のある、散歩をするにはもってこいの目標となるようなものが掲載されているわけですが、このことについてもっと深く掘り下げたのは、それをつなぐ歩きたくなる道が必要なのではないかということで、みなさんの関心が集中したように感じます。ですので、今後、景観というものをもっと掘り下げていくうえで、そうい

う部分にみなさんに関心をもっていただくということでもとまったような気がします。

《長谷川》

ありがとうございました。最後になりましたが、環境のところに対して何かございますか。

《Eさん》

熊川のEです。先ほど第一回目には環境のほうに出ていたのですけれども、所用がありまして意見できなくて、この場でもお借りして皆さんにお話しできたらと思ひまして、機会をもたせていただきましたけれども、今私は環境市民会議のメンバーとなっております。自然環境分科会に所属しております。私がここに所属するようになりたいいきさつは、私自身がウォーキングを実施している中で玉川上水沿いの緑道にふれた、そのことなのでございますけれども、玉川上水を見ますと福生の市域内だけ玉川上水沿いの遊歩道ができていないわけです。全部で杉並まで3.1キロにのぼる開渠部分があるのですけれども、遊歩道はこの福生の2.2ないし2.4キロぐらいの短い区間ですけれどもありません。これをなんとかできたらいいのではないかとこのふうに思っていて、私は応募したわけなのですけれども、今悩んでおります。というのは、先ほどもでもした都市景観のほうに、まあそれを扱っている分科会もあるのですけれども、そっこのほうに鞍替えしようか、それとも自然環境のほうにしようかと。

先日12日に、寿の健康講演会がありましたけれども、このときにもお話しがありましたように、我々がこれからどんどん高齢化が進んでおまして、そのなかで年をとった連中がいきなり健康で死ぬまで生きていけるかということは、非常に大切なことなのだと。そのためには私達がいろいろ健康に注意すると同時に、歩くことを実践することは非常に大切だということを述べられておりました。

そういう観点から見ましても、もし福生市内に玉川上水沿いの遊歩道ができたならば、都市景観としても福生の景観は一変すると思います。同時に子供や老人に安全な遊歩道ができると、一部は通学路にも使えると思います。災害の場合には避難所にもなるとも思います。それから市民の間の交通の利便が増加しまして、市民融和の増進ということも考えられます。それから先ほどでもした障害者の問題ですけれども、障害を持った方々のリハビリの場として非常に良い場所が提供できるのではないかと思います。実際、私はそういう方々が歩いて遊歩道を使っているのを、小川地区とか立川地区のほうで見えています。そういうようなことから、市民の皆さんがこういうことについて感心をもって、もしその造成ということに関して関心をもっていただいで、運動に参加していただければと思ひましてお話しさせていただきました。どうもありがとうございました。

《長谷川》

ありがとうございます。さて、全体を通して今日はこれだけはいっておきたいことをおねがいしま

す。

《Fさん》

Fです。都市景観のほうにでたのですけれども、それとバリアフリーとも関連しているのではと思ってちょっとお話しさせていただきます。

実はシルバー人材センターでこの9月に、70歳以上の方に対してのシルバーバスの交付という仕事をやったのです。これは東京都が東京バス協会に補助金を出しまして、135億円だしているのですが、非課税の方には千円の負担金で出す。その交付の仕事をしている中で、受け取りにこられる方の声を聞きますと、商工会館でやったのですが、ここまでどうやって来られましたかと聞きますと、自転車で来た。自転車にとってのバリアは実は「はげ」なんです。はげがあって坂がある。すると南田園と北田園の下のほうの方は必ず坂を上がってこなければならぬ。これが毎月シルバー人材センターこっちでやっているのですけれども、そのあともう一つ坂を上がらなければならぬ。これもバリアだなど。

それからもうひとつは、市内に先ほど駅が5つあるということができましたけれども、その5つの駅へ到達するための公共交通機関が極めて貧弱なのです。牛浜にはバスが行っていません。東福生にもバスは行っていません。青梅線はどちらかというと16号寄り。多摩川寄りには熊川駅しかないというようなことが非常に不便である。このへんをなんとかしていかないと、これから高齢化して自転車にも乗れない、バスには今低床型のバスと違ってノンステップバスですか、そんなのがありますけれども、そういったものを導入していくとか、昭島とかあきる野でやっているような市内循環バスとか、そういったものを増やしていかないと、高齢者だけの問題じゃないと思いますけれどもね、やはりバリアの解決にはつながっていかないのではないかというふうに思います。以上です。

《長谷川》

ありがとうございます。みなさんに発言をお願いしておきながら、時間の都合上これで打ち切りたいと思います。なぜ申し上げたかということ、次回このような機会があったらぜひ率先して全員がしゃべってくれるといいなという思いからひとこと言わせていただきました。

《司会》

先生には大変ありがとうございました。それでは最後に、今までは長谷川先生は調整だけでしたので、最後に長谷川先生の総括的なご意見を伺っていきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

《長谷川》

それでは、今日の6つのテーマを結んで総括するというのは、ひとつずつのプロジェクトチームに相当きついことをお願いした割には、市民の一人とし

て、さらにきついことなのかなということでもかなり自虐的な気もするのですけれども、簡単な言葉で述べたいと思います。

「福生というまち、非常に多様な価値があるまちということは都市景観等で言われました。また市民は、非常に多様な価値観を持った方々がいらっしゃる。多様な価値観をもった市民がいる。けれどもきょうの価値観、それをすべてつなぐとしたら、やはり心しかないでしょう。

今日は非常にうれしかったことなのですが、こういった場に比較的小中学校の先生というのをお出にならないのですが、何人か見えてくださっているということに、心から感謝申し上げます。

その今いった感謝のできる人、叱ることのできる人、それはすなわち豊かな心を育むことのできるまち、そんなまちであれば必ず暮らしは向上していくでしょう。住みやすいまちになるでしょう。言い替えば、豊かな心をもつ人をつくりつづけることのできるまちづくりのために、それぞれのプロジェクトチームの方々が、市長を先頭にがんばってくださっているのだなあという実感の一部を感じることができたのかもかもしれないという一日であったかと思えます。」

みなさま大変ありがとうございました。

《司会》

どうも大変ありがとうございました。

日本語は非常に難しいものでございまして、最後までよく聞かなければわからないということでございます。（会場内笑い声）

先生、長時間にわたりまして大変ありがとうございました。

それでは最後に市長からあいさつをいただきたいと思います。

《市長》

だいぶ遅くなってしまいまして、本当に申し訳ありませんでした。長谷川先生、大変ありがとうございました。それからご参加いただきました皆様に、心から感謝を申し上げたいと思います。

きょうは様々な問題提起がございました。これは、市役所だけでやれといってもとてもできないものでありまして、皆様のお力をお借りしながら一緒にひとつひとつ解決していく、そういう努力をみんなこれからしていきたい、そう思いながら聞かせていただきました。たいへんありがとうございました。（拍手）

終了